

<論文>

高齢男性の家事実践とライフコース —仙台市におけるインタビュー調査より—

藤田 嘉代子

1. はじめに

現代の日本において、家事や育児、私的領域において行われるケアに関してジェンダーの偏りが大きいことはよく知られている。例えば、社会生活基本調査において、無償労働の代表である「家事」は、男性19分、女性2時間24分でその差は約7倍、有配偶男女の「家事関連項目」では、男性49分、女性は4時間55分であり約6倍の差がある¹。また海外と比較しても日本の家事育児時間のジェンダー非対称は突出しており、是正されるべき問題として長く指摘され続けてきた。

家事は分担として見た場合、すなわち家庭内の夫婦や私的な関係において分け合うべきものと見た場合、その負担が公平である／ないという点が問題になるが、家事をそのような視点だけで捉えていいのだろうか。

そもそも家事をする／家事ができるとはどのようなことだろう。

一般に、ある人が家事をわずかしか行わなければ、その不足を補う十分な経済的余裕がない限り、不十分な栄養、不潔な環境などから、日常生活の質は低くなり、ひいては自身の健康を悪化させることにつながる。特に中高年齢層の男性では成人病が増加したり、セルフ・ネグレクト、孤独死という現象が出現したりしている。

これらの背景にある要因の一つは、男性たちの一部が衣食住に十分関心を払わず、自分自身をケアするスキルが十分身につけていない可能性である。

では家事を十分行えるスキルを身につけるにはどのようなプロセスがあるのだろうか。

本論考では男性の家事スキルの生成について考察するために、高齢男性を対象にインタビュー調査を行い、男性たちがどのようなプロセスを経て家事達人な行為者となったかについて考察する。

¹平成28年社会生活基本調査の結果による。家事関連項目は「家事」「介護・看護」「育児」「買い物」の合計である。

結論を先取りするなら、世代の特徴、特にライフコースがポイントとなるように思う。

かつて、子どもたちにとって、家事を手伝うということは親からの必然的な要請であり生計にとって必要な助力であった。調査対象となった男性たちも子どもの頃、相当な強度のある手伝いをしていた。だからこそ高齢になっての家事遂行は問題なく行われる傾向が見られるのではないか。この論考では、インタビューにおける語りから、高齢男性たちがどのようなきっかけから家事を行うようになったかを記述し、男性の家事スキル生成について探索的な研究を行う。

2. <高齢男性と家事>周辺の先行研究

男性の年齢と家事遂行の関係は、U字型を描き、年齢が若い時と、高齢時に家事を行う時間が増加する。若年期と高齢期を比較すると、若い時の方が家事の取組み時間は長い。社会生活基本調査では、男性全体の平均家事時間は19分、女性は144分であるが、65歳以上になると男性は36分、女性は172分であり、差は依然としてあるものの男女差は7倍から5倍弱程度へと縮小する²。類似の調査として家庭動向基本調査があり、妻の年齢によって夫の家事頻度を問う項目があるが、こちらでは妻の年齢が29歳以下と30～39歳までの夫が、家事を比較的多く行っており、家事頻度は年齢とともに頻度が下がる傾向を示している³。以下では高齢男性の家事労働に関わる研究と、家事労働とジェンダーを考える上で関連する、家事とライフコース、家事と地域性についての先行研究を概観する。

2.1 高齢夫婦の家事分担研究

高齢夫婦の家事分担に関する計量的な分析は、岩井・稲葉(2000)、岩井(2004)、乾(2015)が行っている。岩井・稲葉(2000)はSSM調査、岩井(2004)は全国家族調査(NFRJ98)、乾(2015)は公益財団法人家計経済研究所が行ったインターネット調査をデータとしている。岩井(2004)では、家事の項目として炊事、洗濯、風呂掃除の3項目を挙げ、高齢の夫の家事参加に影響を与える要因として次のような点を挙げている。(1) 男性回答と女性回答で異なる。(2) 60代夫婦と70～77歳の夫婦で異なる。(3) 家事の項目によって異なる。(4) 親との同居は影響していないが、子夫婦との同居の影響は非常に強く、この要因をコントロールすると未婚子との同居の影響は認められない。(5) 妻の家事遂行頻度の影響も

² 平成28年度社会生活基本調査の結果による。全体平均は15歳以上。

³ 第5回全国家庭動向調査(2013)の結果による。この調査では夫の家事頻度が比較的増加する60歳以上の年齢区分がないため、男性と年齢と家事頻度の関係のカーブは他調査と異なり右肩下がりとなっている。

非常に強く、この要因をコントロールすると60代の夫婦では妻の就業、夫の就業、妻の健康状態の影響が低下する。(6) 夫の介護経験は影響しているが、妻が看病・介護していることは影響していない等である。

乾(2015)は高齢期の夫の家事分担について食事用意、食事のあとかたづけ、買い物、洗濯、そうじの5つを挙げ、他の先行研究より詳細な項目について検討し次のような結果を得ている⁴。食事用意について有意な変数は妻の健康状態、本人の就業(-)、妻の就業に関する変数である。食事のあとかたづけについては、年齢、妻の健康状態、妻の就業状態と正の効果が見られた。また本人の就業と妻の食事のあとかたづけ回数には負の関係があり、妻の遂行回数が減少すると本人の回数が増加する関係となっていた。買い物については年齢と、親との同居、妻の健康状態、妻の就業に関する変数が有意であった。本人の就業と妻の買い物回数については負の関係であり、妻の買い物の代替が見られた。洗濯については妻の健康状態、妻の就業に関する変数(自営/非正規/正規)であり、本人の就業と、妻の洗濯回数とは負の関係にある。そうじについては年齢が正の関係にあり、妻のそうじ回数とは負の関係にある。岩井(2004)と同様、男性が高齢期に入って行う家事の多くは、本人が就業していなくて妻が就業している時、妻の健康状態に問題がある時に増える傾向がある。乾(2015)では、夫の家事が、妻の家事遂行の代替となっているのが、洗濯、食事のあとかたづけ、買い物である。一方、食事用意は代替が見られないことから、妻と一緒にいる可能性が指摘されている。

家事は、料理や洗濯、掃除といった「大文字の家事」だけに限定されない。また家事の特徴とジェンダーが関連付けられやすい面がある。アメリカにおける、ケアの分担とジェンダーの研究動向をまとめたColtrane(2000)では炊事、洗濯、買い物は女性的な家事であり、修理、芝刈り、車のメンテナンスは男性的な家事であり、性別中立的な家事は支払いや車の運転を挙げている。お国柄や時代性を反映したものであるが、日本のようにあらゆるところで買い物ができる環境があれば買い物は性別中立的な家事であろうし、車の運転はある世代以上の人々にとって男性の家事である面がある。

2.2 ライフコースと家事

男性の家事労働時間についてコーホート分析を行った佐藤(2010)によれば、平日の「家事労働」時間や行為者率に関して世代効果があり、近年ほど家事時間が短く行為者率も低くなっており、家事スキルや習慣については世代間の経験の違いといった観点が必要であることを指摘している(佐藤2010)。

そもそも家事スキル生成と関連がありそうな子どもの手伝いは世代間の格差が極めて大き

⁴ 乾(2015)の分析は男性回答と女性回答によって異なっているがここでは男性回答の結果に言及する。

い。最近の調査によれば、子どもたちが家の手伝いをするのは小学生男子が3分、女子が5.3分程度である⁵。一方、日本はかつて第一次産業を主とする農業国であり、生家が農家だったり、自営業を営んでいたり、この産業部門で働く人が大半であった。そして高度経済成長以前は、農作業の合理化がまだすすんでおらず、多くの作業が人の手で行われていた。子どもたちは家業経営の貴重な労働力であり、彼らが行う手伝いも負荷の高いものであった。やがて産業構造の変化に伴い手伝いは「買い物」や「食事の手伝い」など簡単なものになった(新井1993)。現代の子どもたちの「お手伝い」の少なさは、子どもたちが手伝いをしなくても成り立つ家業や家事、一方子どもの生活面では遊びや学習、学校外活動が重視される状況を反映している。

2.3 地域性と家事

塚本(2004)は夫婦の家事分担について福井県のケーススタディを行っている。福井県は既婚女性の就業率が高く共働き率が高い地域であるが、親との同居率も高く、男性が家事を多く分担しているわけではないという実態がある。この点に関して塚本は性別役割分業意識が強いことから解釈している。

藤田(2021)では、宮城県の男性の家事・育児遂行について、有職男性に調査している。調査対象者はランダムサンプリングで選ばれていないため単純な比較はできないものの、宮城県男性の家事や育児の遂行水準は比較的高く、家事項目では、トイレ掃除、ベランダ掃除、洗濯(手洗い)、夕食調理、弁当調理などの行為者平均値が高かった。また見えない家事についても調査しており、男性は、旅行や外出先を決めたり計画を立てたりすることのほか、灯油を購入する、庭(ベランダ)の草木の手入れをする、町内会の会合に出る等は妻より多く遂行している。家事遂行の規定要因を探った重回帰分析においては、妻の年齢が上昇すると、一般的な家事、洗濯関連家事、掃除関連家事が増加するという結果が見られた⁶。

以上、先行研究の知見をまとめると、高齢男性の家事は本人が就業していない、妻が就業している時、また妻に健康問題がある時などに多く遂行される面がある。また男性が行いやすい家事があり、男性の実働で妻の負担軽減になっているかどうかは家事の特徴による。さらに

⁵ ベネッセ教育総合研究所『第二回放課後の生活時間調査報告書』(2013)による。

⁶ 家事を最もよくする人の数値が高くなるよう連続変数を作成しこれを従属変数として重回帰分析を行った。一般的な家事とは「日常のごみ捨て」「買い物」「洗濯機使用の洗濯」「風呂の掃除」「部屋の掃除」「朝食の調理」「夕食の調理」の8項目の合計であり、洗濯関連家事とは「洗濯機を使用した洗濯」「手洗いの洗濯」「洗濯物を干す」「洗濯物を取り入れる」「乾いた洗濯物をたたむ」「乾いた洗濯物を収納する」の合計である。掃除関連家事とは「風呂の掃除」「部屋の掃除」「トイレの掃除」「玄関ベランダの掃除」の合計である(藤田 2021)。

コーホート、地域性なども考慮する必要がある。

3. 調査の概要

本調査は2019年11月～2020年の2月の間、仙台市内のA地区で実施した。インタビュー調査は、A地区自治会の協力により対象者の紹介を得る形で行った。調査協力者は10名であり、筆者と対面で、1人は自宅、9人は地域にあるコミュニティセンターにおいて1時間から2時間程度聞き取りを行った。対象者の年齢はおよそ70歳から80歳代となっている。調査項目は、本人および同居の家族の職業経歴、普段行っている家事、家事を行うに至ったきっかけ、また有職時の職場環境、子育て期に行っていた家事および子育て、生育環境、手伝いの経験、地域で担っている役割などである。非構造化されたインタビューとして実施し、提示した調査項目に関わらず仕事や家事、家庭に対する自身の思いや経験について自由に語ってもらった。後日インタビュー時記録した音声データを文字に書き起こした。

インタビューは調査協力者たちの現在の生活に照準した内容ではあるもののカップル調査ではないため、どの程度家事を実際行っているかは語り手の主観的な捉え方となっている。また定位家族、青年期・中年期の家庭や職業の様子など過去を振り返る内容についても聞き取ったが、今—ここで話題としていた、家庭や地域に深く関わる一家庭人・地域人としての自身が強く反映されている可能性がある。

宮城県は第一次産業と第三次産業の従事者が多いが、仙台市のA地区は市中心部で働く人たちの郊外にあたる。A地区は、仙台市中心部まで路線バス1本で通勤通学することが可能で、小中学校、高校や大学もあり、住宅街と文教施設が混合した地区である。60年代中旬か

表1 調査協力者の概要

	年齢	在職時の職業	妻年齢	妻の職業	子どもの人数	同居家族
A	87	公務員	80	専業主婦→パートタイム	3人	息子
B	69	会社員	69	会社員→専業主婦	2人	妻
C	80	会社員	74	勤め→専業主婦	3人	妻と娘
D	76	会社員	69	専業主婦→パートタイム在職	4人	妻と息子2名
E	72	会社員	69	専業主婦	2人	妻
F	83	会社員(食品→設備)	60前後死去	専業主婦	2人	息子夫婦
G	84	会社員	80	専業主婦	2人	妻
H	87	会社員→自営業	48歳で死去	専業主婦	1人	息子
I	82	公務員→会社員	78	専業主婦→パートタイム	3人	妻
J	72	会社員→自営業	72	専業主婦→パートタイム	4人	妻

ら民間が主となり住宅地を造成し地区を拡大してきた。地区には公営の団地があるが、大半は分譲地として整備された。したがって、この地区に住むのは経済的に比較的安定した層である。また分譲住宅がほとんどということもあり、住民の移動が緩やかである。現在は初期に移り住んだ人たちの多くが高齢期を迎えており、地区全体の高齢化が進んでいる。筆者の所属する宮城学院女子大学とA地区は地域の取組みのため連携協定を結んでおり、別件で行った調査において、男性の家事取組み水準が高い事例があったため、男性の家事遂行をテーマとする新たなインタビュー調査を設定し実施した。

4. インタビュー協力者たちの現役時代——子煩悩な父親——

インタビュー協力者たちは60年代から80年代頃に結婚して家族を形成し子どもを持ち、大半がサラリーマンとして働き、子どもの世話や家事の大半を行ったのは妻という、この時代において典型的ともいえる近代家族の夫であり父親である。またおおむね性別分業カップルと言える。男性たちは会社員として企業等に雇用されて働き、妻は家事と子育てに専念する主婦か、子どもが成長した時期にパートタイムやアルバイトを始めるなど再就業のかたちで仕事を始める人が多い。インタビュー協力者で、自営業者はHさんと会社を早期退職して自営を始めたJさんだけである。また、妻は結婚以来ずっと専業主婦だったのが4名（Eさん妻、Fさん妻、Gさん妻、Hさん妻）、専業主婦を経てパートなど短時間就業をおこなっていた（いる）のが、4名（Aさん妻、Iさん妻、Jさん妻（以上現在は退職）、Dさん妻（現職））であり、40歳代までフルタイムで共働きをしていたのは1人（Bさん妻）である。

一方、子どもが小さい時期の子育ての様子を尋ねると、子どもと遊んだり園や学校の行事に参加したり、子どもに相応に関わり、子育てを部分的に担っていたというような発言が多数見られた。

- ・「うちは、男の子だけなので、遊び相手が多いっちゃうか、そっちのほうが主でしたね」（Aさん）
- ・仕事が終わった後小学生の子どもと遊んだり、勉強を見たりしていた。
「あったかい時には年寄りがいるんでご飯が早かったんで。6時ぐらいに食べ終わって、バトミントンしたり、キャッチボールとかいつもやりましたよ」（Bさん）
- ・娘なのでお風呂に入ったのは小学4年生まで。運動会や学芸会はかかさず行った。卓球を教えて、一人の娘は学生時代選手になった。（Cさん）
- ・出張の多い仕事だったが、子どもが小学生の頃は地元にいれば日曜は必ずどこかに一緒に出かけていた。「みんな自転車に乗れるようになったら自転車に乗ってリンリン部隊を作りま

して、近くの川とかによく行きましたね」(Dさん)

- ・土曜はほとんど子どもを連れて歩いていた。「その時は、うちのやつはお休みの日。帰ってきてから、私がトンカツ作ったりなんか。」「普段うちの家内が子どもを見てるわけだから、疲れて大変だろうと思ってね。できるだけ、子どもは私と遊ばせてやろうと思ってね」(Fさん)

会社員として働き稼得役割は果たしつつも、家庭では遊びやレジャーを中心に、幼児期や学童期の子どもの関わったことが数々のエピソードとして語られた。調査協力者たちは子どもと遊んだり家族で出かけたりする、いわゆるマイホームパパであり子煩悩な父親であった。また、Bさん、Fさんなどは料理を作って家族に食べさせるなど食事に関するエピソードを語ったのが特徴的である。

5. 高齢男性の家事遂行

現在高齢期にあるインタビュー協力者たちが日常的に行っている家事は、妻が健在の人と、妻がいない、あるいは要ケアの人とで明確な差が見られた(表2参照)。この分類によってそれぞれの語りを見てみたい。

5.1 妻が健在の場合

インタビュー協力者たちは同居の妻が健康である場合、ほぼすべてのケースで妻が主婦役割をこなし、家事についての全般的な責任を引き受けていた。夫たちが行うのは、調理以外の家事、ごみすてや掃除、洗濯などが多い。また他調査の結果と比べると、食事の後片付けや洗濯など、一種類の家事を丸ごと引き受けている場合も多く、家事量は比較的多い。

家事について相当多く担当しているケースを紹介する。40代の中旬まで妻がフルタイムで働いていたBさんは分担している家事が多く、料理も行う。料理を行わない時には後片付けも行う。

また、Dさんは料理や日常の買い物は妻が行うが、洗濯は全般引き受け、掃除もかなりの部分を分担し、リビングなどの共用部分に掃除機をかける。ごみすてについてはごみを各部屋から集めてまとめ、捨てるのは妻とDさんが半々ぐらいである。食事の後片付けは同居している息子が行う。ホームセンターで植物の苗などを買ってきて庭に植えるのは夫婦で行っている。

Gさんは、家事の主たる担当は妻であるが、夕食を週二回ほど作り、夕食の調理を担当するときは後片付けも行う。掃除や洗濯は主には妻だが、洗濯物を外に干したり取り入れたりする

時には、手を伸ばす動作に不安がある妻の代わりに G さんが行く。美容師であった妻に髪をカットしてもらうことがありその時の清掃や風呂を洗うこともある。

J さんは家事全般に習熟しており、特に料理が好きで朝昼夜と毎食作っている。その他、買い物は妻と一緒にいき、洗濯を分担したり、自身の衣替えをしたり、クリーニング店に衣類を持ち込むなどもする。また別に住んでいる娘夫婦の子どもを預かったり、そのための送迎をしたりもする。妻が運転ができないため、車で行く必要のある用件については全般的に J さんが行く。

5.2 妻がいない／要ケアである人

妻がいないか要ケアである人は、インタビュー協力者本人がほぼすべての家事を行う。

F さんは 20 年ほど前に妻を亡くしており、一人暮らしを経て現在は息子夫婦と同居している。同居していても、F さん自身の生活に関わること、料理や買い物、後片付け、掃除、洗濯などすべて自身が行う。さらに地域の役員も引き受け、近隣の人たちとの交流を多く持っており、日曜大工も得意であることから、地域の一人暮らしの女性のちょっとした大工仕事を引き受けたりもする。また庭に花を植えるなども行っている。息子夫婦と同居しているが、息子と妻は共働きで、特に息子は勤務時間が長く、互いに独立した生活時間となっている。空間的にも 1 階と 2 階で使用スペースを分けており、例えば洗濯については、息子夫婦が休日に行うために、F さんは平日に洗濯するなど、互いに時間帯を融通しながら暮している。

I さんは妻が日常生活についてサポートを要する状態のため、夫婦二人分の家事に加え妻の世話も行っている。妻が行うのは配膳やごみの仕分けなどであり、それ以外のほぼすべての家

表 2 調査協力者の家事分担

	妻の状況	同居家族	料理	料理後片付け	日常買い物	洗濯	掃除	ごみすて
B	妻が健在	妻	△	△	△	妻	○	△
C		妻と娘	妻	○	娘	○	△	○
D		妻と息子	妻	息子	妻	○	△	△
E		妻	妻	○	△	△	○	○
G		妻	△	△	△	△	△	△
J		妻	○	妻	△	○	○	○
F	妻がいない	息子夫婦	○	○	○	○	○	○
H		息子	○	○	○	○	○	○
A	妻が要ケア	施設入所	息子	息子	○	息子	△	△
I		要支援	妻	○	○	○	○	△

○は夫（調査協力者）が担当 △は夫が部分的に担当していることを示す

事、三度の食事の支度や後片付け、洗濯、掃除も行う。自動車の運転免許は返納しているため徒歩で買い物に行ったり、妻の通院の際にはタクシーを使って連れて行ったりする。また、住宅街を回って自宅まで届けてくれるクリーニング店や地元の電気店、住まいのクリーニングなど民間のサービスも利用して手の回らない家事については外注している。地域の活動の役員も多く引き受けている。子どもは3人いるが別に暮らしており、日常的なサポートは特段受けていない。

5.3 趣味と家事の間

高齢の男性を対象に聞き取りを行っていて、興味深かったのは、家事とも趣味とも見なせるような取組みが多く語られたことだった。漬物を漬けるという家事は一般的な消費動向調査においては、行為者率が低い家事といえる。タキイ種苗の調査によれば、普段から漬物を漬けている人は全体で13.4%（男性8.5% 女性18.3%）である（タキイ種苗2015）。漬物を漬けていないのはJさん、それ以外の人はほとんど漬けていると答えた。Gさんは白菜を漬け、干し柿を作っている。干し柿作りと白菜の漬物は関連しており、「(干し柿の)皮を白菜の中に一緒に漬けると、柿の甘みが出るんだね。白菜に。それで唐辛子を入れてちょっと辛くしていただきますね。それは私がやってますね」と答えている。Fさんは漬物はほとんど購入して食べているが、市販品は塩辛いので自身で漬けなおすと答えている。

この地区の住宅の区画は比較的広く多くに庭があり、生垣があったり庭木があったり、さらに花や植物を植えたりして、これらの手入れやガーデニングは広く行われている。Fさんは四季を通じて庭に花を植えている。インタビューを実施したのは初冬だったが、最近パンジーを56鉢買ってきて庭に植えたことが語られた。Gさんは、「庭の手入れは、松の木が2本あって、その手入れは私がやるんだけど、あと下のほうのやつはおばあさんがやって。花とか何かを植えていますね」と答えている。庭木の剪定を自身で行うという人も複数見られた。

Bさんは自身が行っている家事として畑を借りて野菜を栽培をしていた経験を挙げた。家族が入寮している福祉施設のそばにある市民農園を4区画借りて4年間世話をしさらに2区画に減らして4年間野菜を作っていた。最初は福祉施設のボランティアとして始めたが次第に愛着が湧いて続けたという。種や苗、耕作するための道具など出費がかさんだものの「飲んで使うよりは」という気持ちでやっていたという。Bさんは「まったく遊びの世界ですからね。趣味の世界なので。…ちょっと格好悪いけれども、納得してます。自分の実力なので。ダメだったら買って食べればいいやって」と述べている。

また、このBさんは庭で野鳥に餌付けをしている。青年大学で学んだ、冬は小鳥が食べるものがないからと勧められた食餌方法を実践し11月から4月まで自宅の庭からバードウォッチングをしている⁷。庭の松の木に、皮つきピーナッツに糸を通して掛けておいてなくなった

ら補充する。スズメやヒヨドリ、シジュウカラなどがつがいでくることがあり、「それをうちの茶の間から見るとってというのは、非常に私の楽しみでしてね」と述べている。Dさんも家庭で庭に来るスズメに餌付けをしている。「だんだん来る数が増えて、勝手に名前を付けて。面白いですよ。朝昼晩来るんですよ」と言っている。ペットの世話をしている人も見られた。Aさんは庭でコイを飼っており、その世話をしていた。Cさんの家庭では犬と猫を飼っていて、世話そのものは娘がしているが、家庭ごみを捨てる際に猫砂も一緒に廃棄し猫の世話に協力している。

このように趣味とも言えるような家事の遂行が見られる一方、日常的に発生する家事の一つである裁縫についても取組みが見られた。裁縫はもっぱら既成品を修繕することであったが、これについても自身で行うと答えた人が多かった。衣類の修繕はボタンが取れた時の縫い直しが多かったが、Cさんは胴回りのゴムが伸びた時の付け替え、Aさんはズボンの裾上げ、Iさんは下着のほころびを直すなどは自分で行き妻のものもするという。

DIYを行うと答えたのはAさん、Fさん、Jさんである。

また、インタビュー協力者すべての人が町内会役員など地域の仕事を複数引き受けている。

6. 高齢男性の家事遂行のきっかけ

インタビュー協力者である高齢男性たちに日常的に家事を行うようになったきっかけについて尋ねたところ、妻が健在かどうかで分類できた。妻が健在の人は自身の退職や妻が仕事をしていることについて触れ、妻が要ケアであったり死別したりしている人はそれがきっかけとなっていた。また料理への興味を語った人が少なくなかったため、家事遂行の動機の3つ目のタイプとした。それぞれについて見てみたい。

6.1 自身の退職／自身の退職＋妻の就業

インタビュー対象者たちの男性が家事をするようになったきっかけは、自身の退職などで時間的な余裕ができるようになったためである。

- ・「退職後自然と（するようになった）。退職前はしてないですよ。現役の時は」現役の時は朝早く出かけて、7時や8時に帰るとい生活であり、家事はほとんどすべて妻に任せている状態だった。(Eさん)

⁷ 青年大学とは仙台明治青年大学のこと。仙台市が生涯教育の一環で高齢者の学びの場として各地区で実施している「老壮大学」がある。これに参加し卒業した学生たちが自主的に運営している組織。「シニアによるシニアのための大学」である。<https://meiseidai.jp/> (2022年4月30日アクセス)

- ・現在は妻、娘の3人で暮らし、ごみ捨てや食事の後片付けを担当している。「勤めているときはあまりやりませんでした」これらは退職してからやるようになった。(Cさん)
- ・現役の時はたまにやるだけ。「商売が商売でしょ、夜遅いじゃないですか」繁華街に自社製品を売り込みにったりすることもあり、そんな時は帰宅が深夜になることもある。週末もゴルフをするというような生活だった。(Gさん)

さらに、自身が退職して在宅時間が長くなり、一方妻は自身が在職時と変わらず働いている場合、一般的な性別分業関係、すなわち、男性が外で働き、女性が家で家事を行っているという役割関係が逆転する。そのようなケースでは男性が家事をする量が増えている。Dさんは家事をするようになったきっかけは、自身が退職して家にいるようになった時、妻が働きながら以前と同じように家庭の家事全般を引き受けていることを目の当たりにしたこと、と語った。

やっぱりそういうのをしようと思いついたのは、仕事して帰ってきたら、疲れますよね。若いうちはよかったけど、最近なんか特にね、早く疲れる。やっぱりかわいそうかなと。かわいそうだっていうか、やっぱり分担せないかんということ。その当時、(妻が)勤め始めた時からなんですけどね。

Jさんは料理上手で現在も近居の孫の世話をしているが、家事をするようになったきっかけはDさんと同様、当時勤めていた会社を離職して、自営を始めたが、妻は家庭外で仕事をしているという状況だったと述べている。

—いつ頃から、変わってこられたんですか。おうちのことをするように。

J：55歳ぐらいから。だから会社を辞めてからですね。

—でもまだ、55歳ぐらいのときだったら、下のお子さんとかもいっしょに住んでおられたんですよね。

J：いましたね。その頃は。でも、20歳ちょっと過ぎたくらいかな。

—じゃあ、お子さんももう忙しいというか。お子さんの子育てとかしつけて、すごく大事に考えていた、とかいうことはありますか。

J：あんまりないです。

—もう奥様お任せで。

J：ええ任せっきりで。55歳からだもん。やっとうちの中に戻ってきて、うちのことを始めたのは。

Jさんは雇用され働いていた会社を離れ、家で自営の仕事を始めた。退職を区切りとし地域や家庭に戻ってきたDさんとは異なるものの、やはり、離職というきっかけによって家庭や地域に戻ったことが、「うちのこと」を始めるきっかけだと語っている。

6.2 妻死別やケア役割を得たこと

妻と死別したり妻が要ケアとなったりしている男性は家事の自立が見られた。自身の家事を自身が行うケースの他、自身だけでなく家族の家事全般を引き受けなければならなくなったケース、自身が主夫役割を引き受け妻をサポートするケースが見られた。

- ・それまでは「上げ膳据え膳でやってました」「結局女房いないから、自分でやんなきゃいけないからね。だからおかずと思えば、インターネットのレシピ取って、それを見て」(Aさん (妻施設入所))
- ・「(現役時代は)朝も早いし、夜遅いでしょ。だから、家では食べない」妻が亡くなってからは「それ以来、ずっと私の仕事です」(Fさん (妻死別))
- ・「女房が入院しているときは、いろいろ毎朝行って、朝食食べさせて、洗濯ものを持って帰って、新しいのと交換して、私は仕事して。夕方帰ったらそれを洗濯したり、食事作ったりしてたんですけども、食事のほうはだんだん子どもたちは外で食べてくるようになったんだから」(Hさん (妻死別))
- ・(どういう機会に、家事ができるようになりましたかという問いに対して)「必要にせまられてですよ」「私は、24時間勤務みたいなもんですから」と答えている。(Iさん (妻要支援))

6.3 食へのこだわり

インタビュー協力者の男性たちは、退職したり転職したりして在宅時間が長くなったこと、また妻を亡くしたりサポートが必要となったりしたことが家事を多くするようになったきっかけであったが、それらのライフコース上の変化とともに、おいしいものを食べるのが好きで料理をするようになったなど食へのこだわりもきっかけになっているように感じた。これは妻が健在パターン、死別や要ケアのパターン、どちらも見られた。

- ・地域包括センターなどが主催する料理教室に参加して覚えた。(Aさん)
- ・料理ができるようになったのは、結婚してから親と同居だったため母親から覚えたのが一つ。さらに子どもが中学生の時マンガ『クッキングパパ』が流行っていて一緒に読んでいてトマトのコロッケとかオレンジ風味のスペアリブなどマンガに書かれていたレシピを作ったこともある。(Bさん)

- ・(昼食や夕食を作るようになったのはなぜかと聞かれて)「食べるのが好きだったんでしょね」テレビで料理を作る番組を見て、自身で作り始めたのがきっかけ。(Gさん)

定位家族のなかで母や父が料理していることから、親から習ったり習わなくてもなんとなく作るようになったりというパターンと、それまでまったく料理などはしなかったが、あるきっかけからするようになったというパターンがある。

食べるのことへの楽しみをインタビュー中に強く語った、EさんとJさんの事例について見てみたい。Eさんは子どもが小学生の時に参加していた子ども会で「男子の親睦会をやらないか」ということで、父親だけで行う、手作りの料理でお酒を飲む会を始めたことを語った。「どうせだったら料理もして一杯ということ、材料だけは買って、とにかく全部作るかということ。店屋物、刺身とかは絶対なし。こないだの10月にもこういう案内状にしてね」「みんなに配って、それを手分けして、作り方。よーいドンではじまる。それで一杯ここで飲みながら。ワヤワヤと。片づけまで一切女性を混ぜないでやってます」。ただ、このような会はイベントとして行い、家庭では自身の昼食を作るくらいで、料理は妻の役割としている。妻も料理を得意としており、地域の集まりでリーダー役をしている。

Jさんは会社員を辞めて自宅で自営業を始めた頃、妻が作る食事に対して子どもが不評を述べたことがあり、作ってみたのがきっかけと語っている。「それなら自分でやるからと。やり始めたら孫たちも子どもたちも、私の作るのは「おいしい」って言って食べるんだよね」食材は妻と一緒に買い物に行って購入し、料理は作り方がわからない時はクックパッドなどインターネットで調べる。そもそも子どもの頃、父親が台所に立って料理する男性であったこともある。「見ているうちにだんだんとできるようになるんじゃないのかな」。妻から料理を習ったことはなく、妻に比べて味覚に自信があると述べた。

7. 子ども時代の手伝い

7.1 家業や家事の手伝い

インタビュー協力者には年齢の幅があるが、比較的高年齢の80歳代の男性たちは、子どもの頃は農村や山村で暮し、親の生業は自営という人がほとんどである。およそ1940年前後に生まれ、戦後の復興期に幼少期を過ごし、高度経済成長期にサラリーマンになるという社会移動を経験している。子どもの頃はまだ家事を容易にするような便利な家電製品が十分普及しておらず、炊事には特に時間がかかり、簡単ではなかった。子どもは家事の重要な戦力であり、今日の子どものが行う「お手伝い」とはかなり様相が異なっていた。

Cさんが育った家は、両親、祖父母、きょうだい、さらに雇い人がおり大家族だった。親の

生業は農家であったが農作業より家のことをさせられた。子どもの頃にご飯を炊くのが役割だった。「私田舎育ちなもんですから、ちょうど6年から中学生あたりまでは、ご飯炊きまで自分でやらされました」「もちろん、電気じゃないから、焚火でやってまして」「家族が多いもんですから、1升、2升かな、16人ぐらいおりましたから。家族が」と述べている。

Eさんの子ども頃、家は農家で家族は3世代に渡りかつ雇い人が3人いる大所帯だった。手伝いは風呂焚き、さらに家業である農作業の手伝いも行った。「田植えもしました。耕運機でもやりましたし、代かきとかそういうのも全部やりましたよ。扱いはできます。だから作業的には、ほとんどの手伝いをさせられましたよ。畑とか。ジャガイモとか。ねぎ植えたり、いろんなことをさせられました」。これら家業の手伝いはEさんが中学生になるまで行ったと述べている。さらに、中学や高校では調理や弁当作りの補助といった手伝いもしており、手伝いについては「見よう見まねで、どんどんどんどん、教えられなくてもやってきたいうかね」と述べている。

Fさんは生家と育ての親がおり、育ててくれた父親はサラリーマンであったが、自身の手伝いは薪割りと、家のそばに海岸がありそこの掃除が日課だった。「その時は何でもやったね。昔は今みたいに灯油使わないストーブでしょ。ストーブというと薪でしょ。薪切りは私の仕事だったのね。そのうちに行った時もね」「それから、みな、浜ですから、ゴミが寄ってくるでしょ。それを全部きれいにするのが私の仕事だった」と述べている。

Jさんは定住家族が農家だったため家業の手伝いを主に求められ、家事の手伝いはそれほどしなかった。「田植えとか稲刈りの時は、みんなやらなきゃなんなかったけど、それ以外はほとんどやらなかったんじゃないかな」と述べている。家業の手伝いは当時の子どもにとっては一般的なことだった。

小学生が農作業をするのは、現在の子どもから見るとかなり力のいる作業であり、薪を使って炊飯するのも、炊飯器で炊飯するのは異なりかなりの経験やコツが必要だったと思われるが、子どもの頃にこのような作業を当たり前のこととして彼らが行っていたことは注目に値する。これらの男性たちは、ある家事については幼い頃からの経験によってスキルをある程度身につける機会があったと言える。また農作業と家事は部分的に似ており、子どもの頃の手伝いが家事ではなく家業の農作業等であっても、家族のために家事をするという構えがある程度形成されたのではないか。

7.2 近代家族の子どもとしての手伝い

一方で70歳代など比較的年齢が若く、すでに親世代が近代家族で、父親が雇用労働者で母親が専業主婦という家庭環境だった人は、子どもの頃にこれといった手伝いをしていない。

- ・父は公務員で母は専業主婦。子どもの時の手伝いは小豆の下ごしらえや漬物を漬ける手伝い。小豆を虫食いがあるものときれいなものをより分ける。漬物の手伝いは姉がいなくなった大学生の時から。(Bさん)
- ・父親は転勤の多いサラリーマンで母は専業主婦の核家族。住宅街で暮らす。子どもの頃手伝いはほとんどしていない。「言われたことはしてたかもしれませんが、同じことをずっとやっていくことはなかった」相対的に女のきょうだいのほうが手伝いをしていた。(Dさん)
- ・父親が2歳の時に死去。母親は働きに出ていたため、祖父母に育てられる。手伝いはほとんどしていない。(Gさん)
- ・家業は医院できょうだいは多く、家族も多かったが、子どもの時、家事はやったことがない。「私専属の女中さんもいたんだよ。ものすごく、優雅な幼少時代を過ごした」(Iさん)

これらの男性たちは子どもの頃手伝いをしていないか、今日の子どもと変わらない、母親がする調理の補助など比較的軽微な「手伝い」をするに留まっている。

インタビュー協力者の男性たちの語りからは、生育家庭が農家であったり、農漁村であったりして、家の仕事を助ける役割を引き受けざるを得ない子ども時代を過した人から、今日の子どものと変わらない、近代家族の子どもとして、親に世話され遊びや勉強を中心とした子ども時代を送った人までいて、時代の変化が垣間見える。

8. 仕事と家事

これらの世代の男性たちが子どもの頃、負荷の高い家事や家業の手伝いをしているという点は、既存の調査の結果では見られない特徴であり、特筆すべきことである。調査対象者たちは子ども時代の手伝いの経験を<家事スキル>として保持しつづけ、高齢期や主夫役割を実践することが必要となった時期にその<記憶された家事スキル>という資源を用いて、それぞれ現状に対応していると言える。

ただし、一方で子どもの時にこれといった手伝いをする事なく長じて、現役時代は家庭では「縦のものを横にもしない」夫だったが、現在は妻が要ケアのために、ほぼすべての家事に取り組んでいるIさんのような人もいる。Iさんが家事をできるようになったのは「必要に迫られて」であり、子どもの頃は母親以外に女中がいる家庭で育ち、もちろん学校で習う衣食住についての知識・技術はわずかなもので、集会所で行われる社会福祉協議会主催の料理教室に通った経験ぐらいしかない。

であるならば、生育家庭の負荷の高い手伝いという直接的な生活史上の経験に結び付けられる場合、結び付けられない場合も含めてこの時代の男性が生きたライフコースというより広い

社会的な経験との関連性も考慮する必要があるのではないだろうか。当時の家事や仕事、生活を成り立たせるための作業がどれも工程が多岐にわたり力と時間を要するものであり、人の手が多く必要であったという事実と、男性たちが現在身につけている家事スキルを結びつけることは誤りとは言えないだろう。男性自身が、炊飯や薪割りなどの力のいる煩雑な家事を直接実践してなくても、見聞きして間接的な経験として家事スキルの形成に影響することは考えられる。また手伝いの経験が仕事に役立ったと語った人もいた。

仕事に就いてからでも、私は同行したセールスに、玄関というか、会社に入ったらみんなにわかるように声を出しなさいとか、どういう環境になっているかは、行ったらすぐわかるようにしておきなさいだめだよと。ごみは拾って歩けよとか、そういうことは(部下同僚に)厳しく言っていました。(…)車なんかでも、いつも、白い車は月曜日の朝は必ずきれいにしてお出勤させないと。遅くなってもいいから、車洗って、納車して帰きなさいよとかね。そういうことは、うるさかったね、私。(Fさん)

また今回の調査協力者はそれぞれ地域の仕事を引き受けている方たちであった。地域のための仕事の多くは、ただ何かを決めたり組織を作ったりということだけでなく、具体的な作業を伴う。それらは、掃除であったり花壇づくりであったり、家事と関連が深いものもある。インタビューでは町内会役員としての住民を世話する仕事についても語られた。

・Cさん もともと農家の出身で子どもの頃の手伝いは炊飯だった。料理は一人暮らしの頃しかしていないが現在は家庭の中で食事の後片付けとごみ捨てを担当している。地域の活動において役員をしており、住民からの連絡で多様な対応が求められる。最近では一人暮らしの住民からトイレが詰まったと連絡があって対応した。

・Eさん もともと農家出身で料理もする。現役時代は金融機関で働き、退職後地域の役員をするが得意の文書作成以外、求められることは全般的に行っている。町内会の資源ごみ回収の際には曜日によってごみの種類を示す旗を掲げる仕事がある。また町内会として行政から委託を受けて公園の清掃や公園愛護として花を植えたりすることもしている。家のガーデニングについては妻の役割となっており関わっていないが畑で作物を育てていたこともあり側溝の掃除は気がついたら行う。

このような地域の仕事を請け負い地域の人たちと協力して作業を行うことについても、〈記憶された家事〉、あるいはこの世代の方たち特有の〈仕事の経験としての家事〉とのつながりが見えてくる。このような調査対象たちの派生的な家事遂行は、その時代を生きたとしたの

社会的な経験、ライフコースの特徴として捉えられるのではないだろうか。

9. 考察とまとめ

本研究においては郊外地区に住む高齢男性を対象に現在行っている家事や仕事、子どもの頃の手伝いに関する経験を聞き取ることで、高齢期というライフステージの男性にとって家事とは何か、家事スキルを獲得するとはどのようなことなのかを考察してきた。

調査対象の男性たちの多くは、一般的な調査で見られる高齢男性の家事遂行量に比べて、比較的多くの家事を行っていた。きっかけは自身の退職がほとんどであり、また比較的若い人は、自身が就業しておらず妻が就業しているという状況で家事の多くを分担していた。妻が比較的健康的な人は妻が主婦役割を担っていたが、男性は掃除や洗濯、食事の後片付けなどの家事を全般的に分担するありようが見られた。これらは岩井（2004）乾（2015）での知見をおおむね追認するものである。また、妻が死去したり世話が必要になったりしている人は生活に必要な家事のほぼすべて自身が行う家事の自立が見られた。

量的データの知見と質的調査をデータとする本研究の結果を単純に比較することはできないが、乾（2015）では年齢とともに増加する家事が、食事の後片付け、買い物、掃除だったのに比べて、本インタビュー調査ではこれらに加えて洗濯や調理を主たる役割として引き受けている男性も見られた。また乾（2015）で代替されにくい家事として挙げられていた食事準備もかなり積極的に行う男性も見られた。この点は本調査における地域的な特徴と言えよう。

このように見てくると、男性たちは加齢によって家事を行うようになり、現代の父親があまり家事や育児をしなない、ということについてもそれほど悲観することはない、という見通しを立てることもできる。しかし、今回調査した男性たちは子ども時代に負荷の高い手伝いをし、この年代固有の生活や仕事の経験がありライフコースとしての特徴がある。現代ではかつてより父親の家事・子育てへの関与が求められていることなど、ケアをめぐる社会的な理解は大きく変化しているものの、現代の若い男性たちが高齢期を迎えた時、インタビュー協力者のような家事への向き合い方になるかどうかは不明であり、世代という観点から理解することが必要である。

今回の調査は地域コミュニティのネットワークを通じて協力者を得たため、それが高齢男性の家事遂行の一般的な特徴を捉えるには限界ともなっている。対象者は比較的しっかりした経済的基盤を持ち、地域における安定したネットワークを持っている人たちである。本研究では、そのような繋がりを持たない人、経済的に不安定な人は調査できていない。本研究で得た知見をさらに一般化するには、多様な生活状況の高齢男性を調査する必要がある。

謝辞

調査にご協力いただきました仙台市 A 地区町内会のみなさまに感謝申し上げます。

本研究は、平成 30 年度～令和 3 年度科学研究費助成事業（若手研究）課題番号 18K12940『現代男性の生活マネジメントに関する基礎的研究』（研究代表者：木村嘉代子（藤田））の研究成果の一部である。

参考文献

- 新井真人, 1993, 「子どもの手伝いの変化と教育」『教育社会学研究』第 53 集, p.66-83.
- ベネッセ教育総合研究所, 2013, 『第二回放課後の生活時間調査報告書』 <https://berd.benesse.jp/shotouchutou/research/detail1.php?id=4700> (2020 年 9 月 5 日アクセス).
- Coltrane, S., 2000, "Research on Household Labor: Modeling and Measuring the Social Embeddedness of Routine Family Work.," *Journal of Marriage and Family*, 62(4): 1208-1233.
- 藤田嘉代子, 2021, 「宮城県における男性の家事・育児遂行の特徴と規定要因—宮城県調査と他調査の比較から—」, 『宮城学院女子大学 研究論文集』, 132 号.
- 乾順子, 2015, 「高齢期夫婦の家事分担」, 『家計経済研究』, 105, p. 56-p.67, 家計経済研究所.
- 岩井紀子, 2004, 「高齢期の夫婦における夫の家事参加」, 渡辺秀樹・稲葉昭英・嶋崎尚子編, 『現代家族の構想と変容—全国家族調査 (NFRJ98) による計量分析』, 東京大学出版会.
- 岩井紀子・稲葉昭英, 2000, 「家事に参加する夫、しない夫」, 盛山和夫編, 『日本の階層システム 4 ジェンダー・市場・家族』, 東京大学出版会.
- 国立社会保障・人口問題研究所, 2013, 「第 5 回家庭動向調査」, https://www.ipss.go.jp/ps-katei/j/NSFJ5/NSFJ5_top.asp (2021 年 3 月 15 日アクセス).
- 総理府統計局, 社会生活基本調査, <https://www.stat.go.jp/data/shakai/2016/index.html> (2021 年 3 月 15 日アクセス).
- 佐藤裕紀子, 2010, 「コーホート分析法による男性の家事労働時間の動向分析」, 『生活経営学研究』, No.45.
- 仙台市町名別年齢（各歳）別住民基本台帳人口, 2022, <https://www.city.sendai.jp/chosatoke/shise/toke/jinko/chomebetsu.html> (2022 年 4 月 11 日アクセス).
- 多賀太, 2006, 『男らしさのライフコース—ゆらぐ男のライフコース—』, 世界思想社.
- タキイ種苗, 2015, 『漬物に関する調査』, https://www.takii.co.jp/info/news_150714.html (2022 年 3 月 20 日アクセス).
- 塚本利幸, 2004, 「男女間の家事分担と地域特性に関する考察—女性就業率高位の福井県を事例として—」, 『日本ジェンダー研究』, 7, p.29-p.41, 日本ジェンダー学会.

Case studies of doing the household by Japanese elderly men: the viewpoint of life course

Kayoko FUJITA

Japanese men do the little housework, and it poorly influences their health, especially elderly and middle-aged single men. In this study, I want to clarify a process of how men acquire the skills relating to housework. I investigated elderly men who live in the suburbs about what kind of housework they usually performed and how they acquired the skills. For those men who have wives in good health, they performed the majority of housework such as cooking, but the men also went shopping, washed clothing, cleaned, and so on. The men who did not have wives or had wives that needed support performed almost all housework by themselves. In addition, in both groups of men, there were some men cooked every day, worked in the garden and took care of pets, activities widely seen as hobbies. The triggers for them to start being responsible for housework were the retirement or their wife working after retirement, also having to do all the housework after losing their wife or after their wife started to needed caring for. Almost of these men experienced a large of family support as children. This influence much of the formation of housework skills of the men in this generation.